

次期会長講演

SL 過ぎ去りし岐路、凝視めれば愛

おおつき たけみ  
大槻 剛巳 (川崎医科大学 衛生学)

平成26年第84回日本衛生学会学術総会の会長を務めることになりました川崎医科大学衛生学 大槻剛巳と申します。このような大役を無事総会終了まで務めることが出来るのかどうかと、非常に不安に思っておりますが、会員の皆様のご指導とご協力により、思考と試行、そして創造につながる良い学術総会を目指して全力を尽くします。第84回は例年と異なり年度が明けた5月24日~26日に開催いたします。それと申しますのも、第87回日本産業衛生学会が、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科公衆衛生学分野 荻野景規教授を会長に、2014年5月に開催されることもあり、「予防医学ウィーク・イン・岡山」と銘打って、連続開催を実施することにさせていただきました次第です。特に5月24日は日本産業衛生学会の最終日と日本衛生学会の初日を兼ね、合同プログラムを企画しようと案を練っているところです。是非、爽やかな春の岡上で、学術とともに地域の景観や食彩にも触れていただけたら幸いです。

日本衛生学会では「次期会長」講演が通例となっております。これを機に、私の歩んでまいりました道程を振り返りたいと存じます。

と、その前に、京都での第82回学術総会の後、2012年度より理事にも選出していただいているのですが、その懇親会の場で、遠山理事長より「主題歌担当理事」を仰せつかりました(懇親会という場の勢いだけだったとは思いますが)。それでも生真面目な大槻としましては、主題歌候補を作らせていただいております。歌詞を紹介させていただきます。

未来に向かって一日本衛生学会一

古い 研究ノート 開けば  
よみがえる あの頃の 情熱  
今も 想いは 変わらないまま  
環境と 予防を 科学に託す

広く 仲間とともに 集えば  
語り合う 解き明かす 真実  
すべて 成果を 世界に告げる  
健康を 高める 科学信じて

さあ 一緒に 歩いて行こう  
暮れなずむ 舗道に 枯葉舞っても  
凍てついた 木枯らし 吹き抜ける中

ほら 明日の 希望が見える  
掲げれば 目標 力の限り  
Consider, Challenge  
そして Create  
未来に向かって 日本衛生学会

どこか 過去の自分に 似ている  
若者の 眼差しに 感動  
きっと 力が 受け継がれてく  
この星に 花咲く 知識を超えて

いつか 巡り合ってた あなたに  
同じ夢 描き出す 憧憬  
だから みんなで みんなのために  
生命を 育む 知識を寄せて

さあ 一緒に 歩いて行こう  
満開の 桜に 包まれながら  
光る汗 輝く 真夏の彼方

ほら 未来の 笑顔が浮かぶ  
生まれくる命と つながる絆  
Consider, Challenge  
そして Create  
未来に向かって 日本衛生学会

いかがでしょうか？

私の郷里は、京都府福知山市です。父も2008年に逝去し、実家の診療所は解体売却済み、一人残された母も倉敷に転居してきており、更には墓も菩提寺の永代供養塔に納まっておりますので、郷里とは本当に縁遠くなくなりました。

父は三重の医専を卒業後、生理学教室に入局しておりましたが私の祖父の逝去に伴って勤務医となり、その中で博士号を取得するなどの医業を営んでおりました。私が小学4年の時に、福知山市で内科医院を開業、入院の無い診療所でしたが多くの患者さんにも慕われており、現在問題になっております地域医療やかかりつけ医体制などといった状況をそのまま日々の生業の中で実践していた様に思います。

1971年の秋に川崎医科大学附属高校のパンフレットが郵送されてきたことにより、父としても家業の後継者養成ということを考えてもいたのでしょうか、受験しろということになって、翌年春に晴れて川崎医科大学附属高校に入学いたしました。3年間の寮生活(私の頃は一部屋に3~4人、各学年が生活していました。今は個室の様ですが)、更にはそのまま川崎医科大学に進学しても、2年生までは個室ではありましたが寮生活をしておりました。高校の頃に、作ったオリジナル曲に「涙雨」というのがあります。

雨の夜は 一人の部屋で  
降り続く雨に 心を濡らす  
一人歩きが 出来るつもりで  
一人ぼっちで 街を渡ると

吹きすぎる風が 心の隙間を  
冷たくよぎる 今日も  
そんな悲しい 涙雨

雨の夜は 一人の部屋で  
降り続く雨に 心を濡らす  
まるで飼われた 小鳥のように  
いつも小さな 鳥かごの中  
笑い合うことも 忘れたやつらと  
ただなんとなく 生きる  
そんな悲しい 涙雨

雨の夜は 一人の部屋で  
降り続く雨に 心を濡らす  
傷つけ合って 慰めあって  
そんな言葉の 戯れの中  
口に出すこと 虚しい言葉に  
一人で口を つぐむ  
そんな悲しい 涙雨

今日の雨に かすかに匂う  
振り捨てた過去の 甘い香り  
信じてくれる 人がいるから  
誉という名の 荷物を背負い  
うつむいたままで 辿って行くのさ  
この穏やかな 道を  
時に聞こえる 雨の音  
そんな悲しい 涙雨

このまま川崎医科大学に進学して、10年くらい経ったら郷里に戻って、そのまま小さな医院を営みながら終生を過ごしていくのだろうかという未来が非常に具体的に見えていた頃でした。全校生徒200人くらいの寮生活自体は楽しく過ごし、幸いにも受験などに縛られることなく青春を謳歌していたのではありますが、通奏低音のようにこの歌詞の様な青春の中の諦念めいた意識が生まれていたのだと思います。

中学までは陸上競技部で頑張り、そして高校時代は音楽などにも触れていました。この時期の高校～大学への進学は、人生としては最初の岐路であったのかも知れません。

さて、川崎医科大学を卒業して、そのまま川崎医科大学附属病院の内科研修を開始しました。

2年間の研修を終えて、入局先を決める時に、血液内科を選びました。研修の間は入院ばかりを診ることが多かったのですが、その間、結局いつも外科との合同のカンファレンスなどでは、種々の依頼などでも内科医は頭を下げてばかり、また現物を見て触ってさせていらしゃる外科の先生はいつも優位に立たれていて・・・という現状があって、なんとか、自分たちの武器だけで、それも悪性腫瘍に向かっていけないか、と考えた際に選択できたのが血液内科でした(冗談で、当時のその病棟に可愛いNsさんが多かったのが理由と云っておりますが・・・さて、どちらが真実かは秘密にしておきます)。父はこの選択に対して何も申しませんでした。おそらくは消化器や循環器、呼吸器などの症例数の多い、そして郷里に後継者として戻ってくるのに有用性が高いと考えられるような科の選択を希望していたのかも知れません。振り返ると、こでもひとつの岐路に立っていたのでしょう。

血液臨床を2年経た後に、大学院に進学しました。当時の川崎医科大学血液内科は八幡義人教授の下、溶血性貧

血の研究一色に染まっていたのですが、核もない細胞の研究は・・・とか、元来血液を選んだのは腫瘍学を修めたい気持ちだったんだ、という言い訳を並べて、赤芽球の培養を習うという理由で、当時、実験病理学助教授でいらっしゃった発癌機構の解明がご専門の難波正義先生(その後、古巣の岡山大学実験病理学に教授で戻られ、医学部長を経て、現在も新見公立大学学長としてご活躍です)にご指導を仰ぎ、結局、八幡教授との約束で習い終えたら血液に戻ると云いながら、4年間の大学院自体を実験病理で過ごしました。

この大学院の途中に、8か月間ですが、東京大学医科学研究所病態薬理学に国内留学をさせていただきました。当時、八幡教授が骨髄移植について対大学(学長はこれも血液学の柴田進先生でしたが)として移植医療にも向き合っていることを提示するために、誰かを派遣せざるを得なかった事情があったのだと思います。当時の医科研病態薬理学には、教授は溶血性貧血の大家の三輪史郎教授、そして助教授で後に教授となられ日本血液学会理事長なども務められる浅野茂隆先生がいらっしゃいました。浅野先生が移植を非常に精力的に進められていらして、そこで症例を受け持ったりしながら、実験を手伝いするというような立場で勉強させてもらっていました。そして当初予定の八カ月が過ぎる頃、浅野先生や当時、病棟医長として移植を進められてらした講師の先生に、医科研に残るようにと強く勧誘していただきました。この時は、非常に気持ちが揺らぎました。今考えますと、マンパワーの確保だけだったのでしょ、倉敷という田舎の私立医大から東京にやってきて、それでも頑張ってみたことを評価していただいたのかなあと、実は大田区の辺りにマンションを探しに歩いたりまでした次第でした。医科研の人たちにとってはどうか分かりませんが、自分の中では大きな岐路だった記憶が今でも強く残っています。

それでも結局、倉敷に戻ってきました。その後、大学院の中で、当時は非常にまれであった骨髄腫の細胞株の樹立に成功したりもして、非常に充実した大学院生活を送ることが出来ました。後半は、骨髄腫細胞株におけるがん遺伝子のメチル化の解析などを行ったりすることもできました。そして、4年間の大学院生活を終える時に、丁度、ご指導の難波先生が古巣の岡山大学実験病理学の教授選考の時期、自分としては臨床よりも基礎医学研究に強い興味を抱くようになっていたこともあって「付いていきます」と宣言したりしました。これまた結局は、難波先生にしても教授就任への確証もないままであったので血液内科の臨床に戻ることにしたのですが、この選択も、自分の中では大きな選択でした。東京に残るかどうか、という岐路とともに、非常に大きな決断だったのかも知れません。

とはいえ、その後の3年間の血液臨床も勿論、興味深く対峙してきました。当時、そろそろ痛告知という問題が出てきていたこと、大学院の間で組織培養などに習熟したこともあって、末梢血幹細胞移植を試みる体制を整えることが出来たこと、白血病に対する化学療法の実績が向上してきたこともあって、率先して告知とともに手を携えて医療チームと患者さんやそのご家族が病気に向かっていくという状況を作り上げて行ったこともありました。

そうこうしている間に、やはり留学のことが出てきます。教授の赤血球の仕事ではなく、骨髄腫というカリンパ系腫瘍が研究テーマだったこともあって、メールもウェブもない時代に、あちこちに手紙を書いて、NIHの血液

病理の研究室から来てよいというお返事を頂戴しました。FAXなどでのやり取りで、4月から行く予定にしていたのですが、期日が迫っても梨の礫、どうなっているのやられて思っていると、ラボのボスがすっかり忘れていたということが判明し、かつ、当時ミネソタ大学に留学中だった先輩が戻ってくるのが決まっていた、籍がなくなるといった事態でした。バイトで1年過ぎるか、どこかにもぐり込むかということで、戻ってくる先輩と入れ違いにミネソタ大学の血液内科で、赤血球と鉄の仕事で1年、その後晴れてNIHの血液病理研究室に移動することが出来て、そこで3年過ごしました。リンパ腫の組織からDNAやRNAを抽出し、転座している責任遺伝子やその変異の検出、腫瘍抑制遺伝子 (CDK-Iなど) の発現を検討する仕事に明け暮れました。

この留学に関連する騒動は、しかし岐路という認識はなくそれでも満足いく留学生活を送ることが出来ました。

ただ、既に米国での生活も3年半となってきた頃、そろそろ帰国を考えはじめ、さて、どこかの研究所とかを模索をし始めようかと思っていたNIHの秋が深まる頃、朝一番でラボに八幡教授から国際電話が入ってきました。川崎医科大学衛生学の植木絢子教授が、私が帰国するなら衛生学に入らないかしら? と尋ねていらっしゃるというお話でした。直接、聞いた話ではないのですが、私の弟が川崎医科大学の形成外科の大学院生で皮膚科の先生の指導を受けていたこと、植木絢子教授のご主人は当時皮膚科の教授をお務めだったこと (のちに学長もお務めになりました)、当時、泌尿器科から衛生学にいられていて講師を務められていた先生が臨床に戻られることになりそうだということ、などがあって、で、どうも弟から私が戻り場所が無さそうだという話が伝わったのではないかなと感じておりました。

ここは大きな岐路です。翌年春に帰国して半年経ますと40歳になろうという年齢、それまでそれでも血液腫瘍関係の仕事をしてきていた身にとって、研究領域を大きく変更することが可能なかどうか、まだまだ父が自分を川崎医科大学附属高校に入学させた要因・つまり後継者となるということについて結論も出ていない中で基礎医学系に進んでもよいのかどうか、などなど、本当に苦慮する事態でした。勿論、どんな岐路でもそうですが、どちらの立場に立っても理由付けは十でも百でも構築することは出来ます。そのことに気付いたら、自分の感覚に委ねるしかありません。結局は、研究畑に入ることに抵抗がない、というか興味が一杯であったこと、更に母校に戻るといふことにも後押しされて、1996年の春に川崎医科大学衛生学教室に入ることになり、日本衛生学会にもその春から会員とならせていただきました。

当時から植木教授のご指導で教室としては「珪酸・珪酸塩の免疫影響」がメインテーマでした。ただ、衛生学に所属して数年は、このテーマでも仕事はしつつ、血液内科時代の仕事を引きずって「骨髄腫細胞株の樹立と細胞生物学的な解析」も継続していました。帰国後も、10株に近い骨髄腫細胞株の樹立も出来、これらの細胞株は国内外で使用していただきました (現在はすべて医薬基盤研究所の細胞バンクに委譲してご利用いただいています)。幸いにも日本衛生学会は懐の深い学問領域を扱っていることもあって、種々の転座を有する骨髄腫細胞集団

から発癌や痛進展、あるいは特有の症状などにつながる細胞・分子生物学的な解析ということで、学術総会などでも報告させていただきました。

しかし、この当時、40面を下げて日本衛生学会やその他関連学会に参加したりもするのですが、本当にどなたも知っているお顔がない状況の中で、今後この領域で研究を進めようと考えながらも、学会に出向いてもお話どころか挨拶をする方さえいらっしやらない状況で、本当に途方に暮れていました。

2003年に学内で昇任させていただき教室を預かることになりました。この段階でも果たして父は私が後継者として郷里の丹波に戻ることにどう思っていたかは現在も不明のままです。ただ、冒頭でも触れましたが、父は卒業後まず生理学教室の門を叩いた様に、どうも基礎医学領域で学問の徒として活動することを目指していた様です。それもあってか、昇任した時には殊の外喜んでくれました。倉敷にきた理由から考えますと、とっては親不孝なのですが、両親、家族には感謝で一杯です。

衛生学に入ってから、「骨髄腫の細胞生物学」と「珪酸・珪酸塩の免疫影響」の両面の仕事をしていたのですが、昇任していただく前後で、比較的年齢の近い骨髄腫先生と、環境医学のそれぞれの専門家の先生の1時間強の特別講演を拝聴する機会がありました。どちらも素晴らしい洞察と企画に基づいた研究成果の総括でした。翻って自分が教室を預かっていくことを考え、大学の体制や多くのことを考案してみますと「狭い庭に二本の全く異なる木を植えても、養分その他の取り合いでどちらも十分には育ってくれない」のではないかと考え、それ以来は、「珪酸・アスベストの免疫影響」と幹として、若い教室員が枝葉を思い思いの得意な方向に抜けて行ってくれる土壌を作ることに専心するように努力しました。また、派生的な研究も健康科学の側面を重視した観点に立脚するように心がけております。

このような中で、日本衛生学会では、2004~2006年度に編集委員、2006年度からは繊維・粒子状物質研究会の代表世話人を務めさせていただきました。更に2010~2012年度で和文誌編集委員長を仰せつかり、2012年度からは理事とともに全体の編集委員会を務めております。日本衛生学会の中では新参者という意識がいつまでも離れて行かないのですが、それでも日本衛生学会会員となって16年が経過しました。

臨床をしてきていたことで、健康障害を持たれている患者さんの苦痛や哀しみ、持って行き場のない憤りなどは、深く心に刻まれています。医学医療に携わる者は、そういった人々に対する愛をこそ、しっかりと胸に抱いて研究に邁進するしかないと考えております。教室員の皆は本当に良く頑張ってくれていますが、皆それまでの背景はあまり医学医療に関係する領域ではなかった若者も多いです。そういう時に、私が伝えたいと思うこと、「今、振っている試験管、今、回しているPCRの結果が、3年、5年、そして10年先の健康障害を被られた方の福音になるように実験をしよう、愛を込めて」こんな言葉を投げかけながら、努力していきたいと思っています。「凝視めれば愛」です。

若者に向けたメッセージならば、冒頭の主題歌は、やや対象の年代層が上だったかも知れません。若者たちに

はアップテンポで、ラップも入った曲がいいでしょう！  
それでは、こちらの曲を！

まも いのち  
衛る生命—Song for JSH—

ほら 座り込んで  
泣いてるように  
うつむいてる キミ  
うちひしがれた キミ  
さあ この手をとって 前を向くんだ  
何かに曝されて  
咳き込んでなんかいないで  
うごめく虫たちに  
ついはまれても Don't mind  
未来はきっと  
キミの 手の中にある  
いつかは jump  
どこでも chance  
限りなく fly away  
きれいな花を 愛する心 届け  
Shall we sing?  
Let's dance together

ほら 肩落として  
やりきれなくて  
涙流す キミ  
嗚咽にむせぶ キミ  
さあ 初めの一步 踏み出してみ  
彷徨うばかりなら  
棒のよう ひきつる足で  
それでも 立ち上がる  
勇気をもって Be brave  
世界はいつか キミに 扉を開く  
いつかは jump  
どこでも chance  
見上げれば sky high  
いとしい想い 見つめる気持ち 届け  
Shall we sing?  
Let's dance together

かけがえのない すべてを衛る  
地球の環境 輝く健康  
科学の探求 眩しい生命  
そして ひとりひとりの  
今日が 果てない夢に 溢れるように

Consider

緑のこの星に 生まれ育って  
その意味  
だから 思考する 私たちは  
導き出される  
彼方の真理を 捜して  
ここに集う  
ここで手を合わせる

Challenge

いつかは解き明かす 命の不思議  
究める  
さらに 試行する 私たちは  
変わり行く世界  
確かな予防を 目指して  
ここに集う  
ここで心込める

かけがえのない あなたを衛る  
溢れる感情 心も純情  
愛さえ追求 捧げる生命  
そして 情熱たぎる  
きっと 明日に届け 誇りに満ちて

ほら そのハートに  
耳をすまして  
感じている キミ  
視線をあげた キミ  
さあ まさに今 立ち上がるんだ  
見知らぬ街角で  
初めての 出会いが生まれ  
南の 風が吹く  
体預けて right now  
光の中で キミは 自由をつかむ  
いつかは jump  
どこでも chance  
今こそ departure  
輝く瞳 あなたを見つめ I love you  
Shall we sing?  
Let's dance together

Create

差し出す掌に 伝わる鼓動を  
笑顔に  
かえて 創造する 私たちは  
大きく拓ける  
自由の翼に 任せて  
今 飛び立つ  
渾身の力で

かけがえのない 未来を衛る  
新たな誕生 弾ける理想  
想いを共有 つながる生命  
そして 絆結んで  
遠く 宇宙の彼方に 希望を抱いて

Japanese Society of Hygiene